郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

MONTHLY MAGAZINE KOBEKKO DESEMBER 1961 NO. 10

12月号

Hino コンテッサ
神戸日野自動車
TEL④5771～5

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です

神戸の女性

お歳暮・クリスマスの贈り物は
ハイセンスの大丸で！
どこよりも良い品を　どこよりも安く　どこよりも親切に
daimaru
神戸店
電 ③8121

12月目次

PHOTO／神戸の女性・杉尾友士郎 1
れんさい随想⑥／原口の忠やんへ・阪本勝 4
し連載第9回ここに神戸がある
気楽な町・司馬遼太郎 8
神戸っ子放談／嘉納正治 12
ずいそう／王様の宝石・鴨居羊子 14
神戸だからえがく夢・藤本義一 16
ずいそう／神戸に住むしあわせ・市来崎のり子 18
映画戯評／ティファニーで朝食を・名村喜久江 21
花時計・レリーフ／松井高男・伊藤誠 23
うまいものコーナー／神戸の天ぷら 24
クリスマスプレゼント案内 28
パーティの装いに寄せて・福富芳美 32
座談会／宝石アレこれ・ゲスト黒木ひかる 34
KOBEKKO SHOPPING GUIDE 38
対談／橋幸夫&木田ヨシ子 42
ピンクコーナー（T） 43
短編読物／沈んだ欲望・陳舜臣 47

表紙・中西勝／カメラ・杉尾友士郎・米田定蔵／デザイン・橘昭三

原口の忠やんへ

阪本勝
え・中西勝

としも暮れてきた。この一年、うれしいこと、悲しいこと、さびしいこと、とりとめのないことなど、たくさんあった。

それらのなかで、いちばんうれしかったこと、それは親友、原口の忠やんが、神戸市長に四選されたことだ。

私はこのよろこびを酒のさかなに、この年末を存分たのしむつもりだ。

◇

人も知るとおり、首長は二期八年がいちばん適当な年期と、私は心得ている。このことはいろいろの機会にい

ったこともあるし、文章に書いたこともある。しかし、忠やんに関しては、つねづね、つぎのような説明をしつづけてきた。

まず、イギリスのロンドンの旧衛生局長を見たまえ。当人の名まえは忘れたが、彼は大ロンドンの衛生局長を、じつに三十年つとめた。そしてあの大都会のいっさいの衛生問題を一身にひきうけて働きぬいた。その功によって、宮中席次がどんな風になっているかをみなさんに伝えよう。

イギリス宮中の席次は、第一がカンタベリー大僧正、第二がロンドン市衛生局長、第三が総理大臣、第四が野党の党首!!

◇

この厳然たる事実を、じっと胸に手をあてて考えてごらん。すべての人々に適用できない考えかただが、ウチの忠やんには、キチンとあてはまる。

四選でも、五選でも、六選でも、ハラグチ工学博士をコーベはもとめているのだ。私の原則論、すなわち三選反対論などに、こだわる必要はもうとうないのだ。

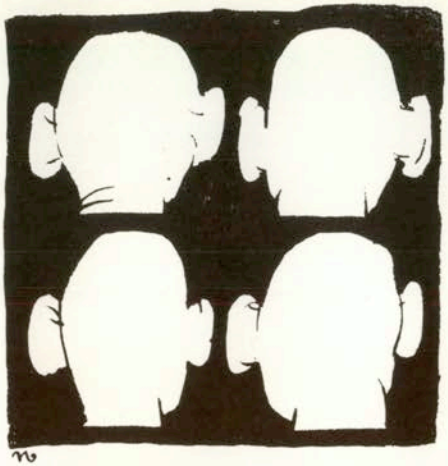
忠やんよ、よき市長として、死ぬまでやってくれたまえ。(死なないでおいてくれ、とは、なんぼなんでもいえんじゃないか)

忠やんよ、きみは日本で得がたい大技術者だ。大エンジニヤだ。堂々と、胸をはって、わがコーベのために働いてくれたまえ。それがわれら市民の真実な熱願なのだ

◇

なぜオレが〝神戸っ子〟に、毎号〝れんさい〟を書かねばならないような、因果なことになったか。それをちよっと書いておきたい。

月も日も忘れたが、私は明石の〝かき繁〟という、いきつけの店に行ってそこはかとない夕をすごしていた。ひとりでは興がないので、たれか酒のみ友達が明石にいないかとたずねると〝木村書店〟の木村がいいとみながいうので、よかろうということになって、キムラを呼ん



で、いっこんさしかわした。ところが、キムラがどこかに姿を消してしまった。

「キムラのやつ、どこへ行きゃがった」と、私はどなってみたがわからない。

◇

そこえ突然現われたのが、たれあろう〝神戸っ子〟の大編集長、五十嵐恭子女史だった。つまりオレの知らぬまに、恭ちゃんに電話をかけて、タクシーをひろって、明石まで大いそぎかけつけさせたわけだ。この機会をはずしては、サカモトをくどく手はないぞ、とキムラが恭子に教えたことが、あとからわかった。

かくのごとくにして、恭子は私の部屋に来た。（その間三十分たらず）そこで、まんまとふたりの計略にかかった私は―かの女の編集者たる熱情にうたれた。「よっしゃ、なんぞ書いたろか。これからなんべんでも書いたるで……」といったことをハッキリおぼえている。それをかの女は、ああ、あの偉大なる編集長は〝れんさい〟とご命名あそばした。これはキムラの謀略と恭子の才能が一致したふしぎな瞬間だった。

◇

それ以来〝れんさい〟という魔物に私はとりつかれている。私は敗けた。恭子は勝った。

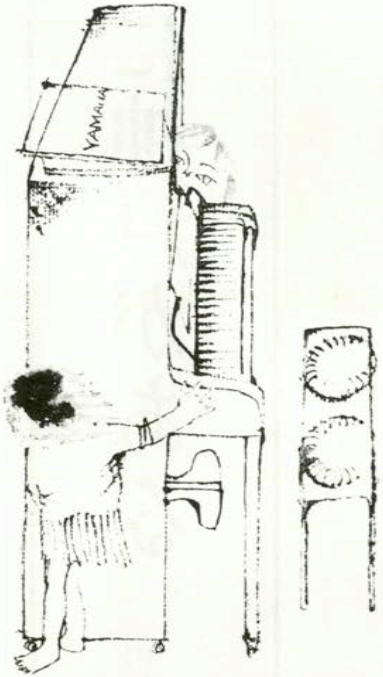
この縁により、この度、忠やんのことを書いている。縁とは不思議なものだ又、かたじけないものだ。

忠やんよ、忠やんよ、すこやかに、おおらかに、四度目の任期をつとめてくれたまえ。どうせ、オレの方がサキだ。オレはおさきに、しつれいいたします。あんたのように、ゴルフで肉体をきたえるなんて、気のきいた、しかしすかん芸は持ちあわせておりませんから。

だが、この大神戸にとって、君にまさる市長はないのだ。尊兄、すべからく、自重、自愛、わがコーベを守りくだされ。とし暮れるにあたり、後輩、阪本勝、謹んでもうす。

（十一月二十五日暁記）　　兵庫県知事

日本の音楽を育てる
ヤマハピアノ……



ヤマハピアノ

神戸もとまち
日本楽器
元町 2丁目　TEL③1631～2

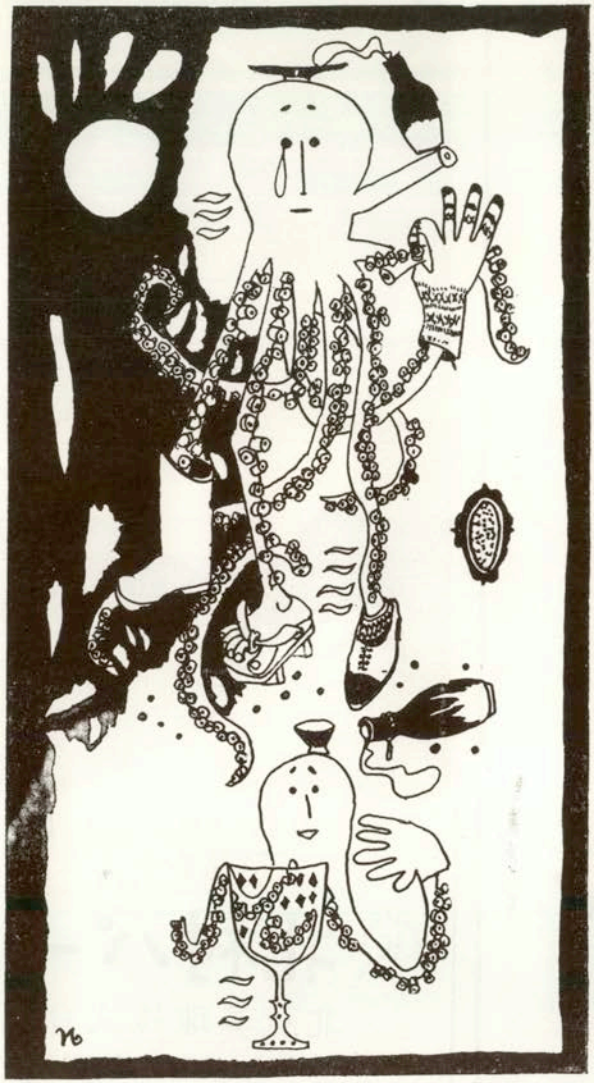
クリスマスの装いに
気品をそえる真珠

北村パール
北村眞珠株式會社
神戸／元町2・東京／スキヤ橋センター
TEL③0072 (571) 8032

連載　第9回

ここに神戸がある

司馬遼太郎
え　中西　勝



気楽な町

毎月一度は、「神戸っ子」の五十嵐恭子さんがさそいにきて、神戸へ出かける。これで九度目である。

帰りは、かならず元町の「蛸の壺」に立ち寄る。私は食痴だが、ここのたべものだけは、まずくない。それに、あるじの木村さんの適度のぶあいそうさと、ぶの厚い微笑が、また賞味にあたいする。

この木村さんというのは、北京でながく住んでいて、はなしが中国のことになると、多弁をおさえつつも多弁になる。とくに中国料理の知識にかけては、ちょっと、私の知りうるかぎりの日本人のなかで、類がない。以前私の家内などは、木村さんのはなしに感嘆するのあまり店を出てから小声で、

「あのひと、中国人?」

ときいた。この人物は名代のあわて者だから私はこの種のことには馴れているが、中国ファンの木村さんにとっては、これほどうれしい間違われ方はあるまい。

もっとも、長州（山口県）のひとだそうである。学校も山口高商の出身で、長州なまりがぬけない。

長州方言の発音というのは、地方弁の発音のなかでもアクセントやイントネーションが朝鮮語に似ている。

もともと、出雲、石見、長門、周防というのは、日本古代においては筑紫とならんで朝鮮人の渡来の多かった土地だし、戦国時代、防長の大名だった大内氏は、対中国、朝鮮貿易で巨富をきずいた。その土地の出身の木村さんだから、どうしても、似ている。家内がおろかにも

「中国人?」

と早合点したのも多少むりもないのである。

ところが、この日、「蛸の壺」に立ちよる前まで、私は神仙閣で神戸の華僑のあつまりにまねかれていた。推理小説「枯草の根」で江戸川乱歩賞をえた陳舜臣君の祝賀会で、九割が在留中国人の紳商である。

この紳商たちは、木村さんよりも流暢な日本語の発音でテーブルスピーチをした。しかもほとんどの話し手は、「われわれ華僑から作家を出した」とはいわず、「われ

われ神戸っ子から作家を出した」という意味のことをいってよろこんだ。

おどろくべきことである。

そのあたりに、神戸という町のもつふしぎな魅力が指摘できるようにおもわれる。

木村さんにしてもそうだ。木村さんとその店の「蛸の壺」は神戸のもっとも神戸的なふんい気の中心の一つだとおもうのだが、亭主の木村さんが根っからの土地っ子ではない。

大阪や東京は、これからみるともっと閉鎖的で排他的である。道頓堀の「たこ梅」のおやじさんは傍若無人な人物だが、この人が生えぬきの大阪人であるというたった一つの理由で客から許されているし、東京でもたとえば築地の魚河岸のすし屋などは、代々の江戸っ子でないと客は尊敬しないのだ。

神戸はそうでない。

みんなが、それぞれの個性を持ち寄って、町のふんい気をつくりあげている。木村さんが長州弁まるだしでいかにも神戸、といった店をつくってしまっているし、華僑も、華僑意識以前に神戸っ子意識がつよいのである。

つまり、町が気楽にできているのだ。だれも土地っ子であることを誇らないし、誇るのは無意味だとおもっている。みんながこの町の自由さを愛し、個性をまるだしにして暮らしている。

そういうキサクさがこの町の魅力なのだ。

「そうやないか」

と五十嵐さんにいうと、このお嬢さんのクセで、たてつづけにうなづき、

「そうです、そうです、そうです」

とうれしそうに答えてくれた。

（作家）

オシャレをたのしむ帽子の店

マキシン

トア・ロード TEL③6711～3

FUGETSUDO

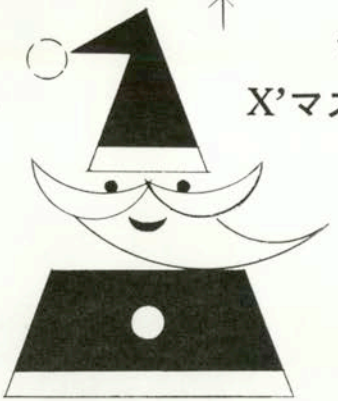
贈る悦び 味覚の愉しみ

クリスマスプレゼントに
お歳暮に！

ゴーフル

マロン
グラッセ

X'マスケーキ



クリスマスケーキの予
約は早い目にどうぞ

創業 明治三十年

風月堂

神戸・元町三 TEL. 神戸 ③ 695・696